

米山梅吉記念館 館報

2008
(平成20年)

秋

Vol. 12



16歳で故郷長泉を飛び出し東京に出た梅吉は、米山家の支援を受けず、自力で職を得て学びながらお金を貯めた。当時、100円あれば留学できると言われていたが、スクールボーイとして働きながら、アメリカ各地の大学で勉強を続けるには、並々ならぬ気力と体力が必要であったであろう。その後の、勉学に勤しむ学生への援助は、この苦学経験から生まれたといえる。

東京RCが米山の遺志を継いで米山基金が生まれ、米山記念奨学会となる。奨学会は財団創立から41年。現在、この奨学会で学んだ学友は1万4千人にのぼる。学習意欲に燃える若者を支えるこの制度は、単に財政的な支援に止まらず、関わったすべての人と人の心を結んでいく。

この奨学会の同窓会である米山学友会は、日本国内はもちろんのこと、台湾と韓国にもある。台湾には1983年、海外初の米山学友会、社団法人中華民国扶輪米山会が発足。台湾での社会的奉仕や、台日交流の援軍として積極的な活動を展開している。

米山の名の下に学んだ人の輪は、今日もどこかで輝く笑顔となっている。



財団法人 米山梅吉記念館



理事長に就任して

理事長 渡邊脩助

梅雨が明けた途端、猛暑の連続ですが、記念館からの夏の富士山は超大です。

全国のロータリアンの皆様、米山梅吉記念館で
才、年間の変わらぬご支援ありがとうございます

宮城・岩手内陸地震の第2520地区の皆様には心より御見舞を申し上げます。

私は4月の記念館、春の例祭時の理事会で第5代理事長に推举されました。地元三島R C の渡辺脩助です。ロータリー創立100周年年度（2004～15）の当地区的ガバナーを務めました。記念館の近くで理訪しておられた皆様に感謝です。

理事長就任は私にとりまして、身に余る光榮と感謝申し上げるとともに、その責任の重さを痛感しております。

去る。2月7日、内藤前理事長が突然ご逝去されました。87歳という高齢でありました。昨年11月の地区大会ではお元気なお姿を拝見しましたので、まだまだと思っておりましたが、誠に残念でした。誰んで哀悼の意を表し、御冥福をお祈り申し上げます。

内藤財團理事長は、平成10年の新館建設時の建設委員長を務められ、その後、記念館理事長として10年間、新館の健全な運営と新しい事業の展開により、全国的な組織に拡大し、全国から多くのロータリアンに御来館して頂けるようになりました。2002年11月には、ビチャイ・ラタクルR.I会長の公式訪問を頂き、ロータリー徽章掲示が認められるようになりました。R.Iから各地区合同奉仕活動のひとつとして認められました。また、35周年記念事業として、「超我的人、米山梅吉の童音」という素晴らしい記念誌を発刊されるという、数々の素晴らしい業績を成し遂げられました。

私は就任をお引受けした以上、我が国ロータリーの創設者である米山翁吉翁の遺徳を仰び、その偉業を後々まで顕彰し、ロータリー関係資料を保管・整備し、ロータリー精神の普及を行い、広く社会に貢献するという目的をもった記念館の意思の研究実現と、円滑な運営のために、非力ではあり

ですが、努力する意慾であります

米山記念館は春・秋の例祭を恒例しております。春は米山翁の忌祭、秋は創立記念祭です。今年の秋は長谷川 了翠隸字園理理事長(浜松北RC)による「三井恒恩会(初代理事長米山梅吉)の結構撰誠と教鞭授助」と題してのご講演を頂く予定であります。

予てよりの都市道路計画による、道路整備が行われ、米山窓として唯一残っておりました「長屋門」は解体されました。道路計画が完成すれば記念館への道幅もわかり易くなることと思います。

7月10日には台湾学友会が、6年ぶりに米山鶴吉翁の墓参に記念館を訪問されました。阮允恭理事長や許国文バストガバナーをはじめ、学友16人とその家族、合わせて22人が来館されました。米山記念獎学会板橋理事長も御同行され、曲の幕前で立って合掌し、米山記念獎学会への感謝の意を表されました。

さて、記念館の運営は厳しい状況になって来ております。

米山記念館は第2620地区で駐立財団法人として、地区からの支援をうけておりますが、日本全国のロータリアンのものもあると思っております。そのような思いから、全国の100円募金運動、賛助会制度はじめ地区資金、神奈川2地区、米山記念奨学会等からのご援助を受けて運営しております。最近の会員の減少にも拘わらず、記念館への来館ロータリアンは増加しておりますが、何故かスマイルが減少しております。ロータリアンの體が寂しいのか、奉仕の心、想いやりの心の欠如か、それとも記念館の全国ロータリアンへの情報発信に問題があるのか、大いに反省・検討されなければなりません。

私たちも日本ロータリアンのメッカとして、「来山館で」をして頂けるような記念館になるよう、内容の充実、来山イズムとロータリー精神の高揚を図り、日本全国からのロータリアンと来山奨学生のご来館を心からお待ちしております。



■ 日期：2008年4月29日(火)

書名處：韶光山懷志紀念館，卷二九

春季例祭



記念
講演

米山記念奨学会事業の現状と将来

板橋敏雄

私は昨年8月、舊任の島津理事長が任期を終えられて、その後任に就任いたしました。全く思いもよらないことでありましたが、振り返ってみますと私の人生は流れ彈に当たりやすいようです。本人はそんなことを考えずにきたわけです。私は30歳の時に足利東RCのチャーチメンバになりました。そもそも私の親父がロータリアンにならないかと説かれて、親父はあまり外交的なタイプではなかったので、ちょうど東京から修行を終えて息子が帰って来たからと、私の名前を書いて知人のロータリアンに渡した、というのが私のロータリアンの始まりです。入ってすぐは面も裏もわからない。そんな状態でした。ロータリーに入って3年目だったと思います。地区大会が新潟であり、白髪の高貴な感じの方が来ていたときをかけて「よくいらっしゃ

しゃいました」と32、3歳の私を握手で迎えてくださいました。中に入ってプログラムを見るとその方は銀行の頭取さんでした。私は当時お金借りるのにその取引先の支店長の前で気をつけをして「お願いします」と言っていたのに、頭取が手をさしのべて「いらっしゃい」と言っていただけ。ロータリーとはなんと横糸の世界。我々は毎日報社会で苦労していましたので、ロータリーのすばらしさを実感しました。

55歳のとき、10月1日にバストガバナーから呼ばれました。「君にガバナーをやってもらうことに決まった」と。そのころは英城と船木が同じ地区で交互にガバナーをやっていました。3年先のガバナーノミニーに今まで決まっていた方が健康上の理由でおりられる。おまえしかいないと言わわれたわけです。これも逸れ弾です。しかし私の性格から当たった以上は一生懸命やろうと思いました。1985年にボリオが始まり、私が1987-8年チャールズ・ケラー会長のもとでやりました。私はボリオガバナーと言われるくらい一生懸命やりました。その後、S A Aで国際大会や国際協議会などを経て、2001-03年までR I理事を務めました。

ロータリーは非常に多様性の世界です。職業的にも、色々な人柄がいるという多様性の中で、自分を磨くことがロータリーの大きな魅力だと思いました。私が仕えたR Iの会長は2001-02年のリチャード・キングさんというアメリカの方で、この方の考え方はリーダーとは天空をイーグルのように舞って下界を見下して指導する。というものでした。続いてタイの副会長をされたビチャイ・ラタクルさん。王に両膝を下ろして頭を下げる。これは、経済格差ではないと思います。むしろ朱山の奨学会のすばらしさを知らない、関心を示していない、「知識の格差」がこういう事を指しているのではないかと思うのです。

「人をつくり、世界に恩くす朱山」という言葉があります。これについては朱山学友の皆さんのが、いかにアジアで活躍をされているかをご紹介してみたいと思います。

昨年12月7~8日、台湾の朱山学友会総会に参加してまいりました。140~150人の学友の方々が台北に集まり、活気のある会でした。私が最も感動したのは、学友として台湾に帰ってそんなに時間の経っていない若い学友の方が、私と名刺交換するときに「私は何処のどこの大学で学び、どのクラブでお世話をになりました」と大学と世話クラブの名前を並行して説いていました。これこそ他の奨学会にはないものだと思

クラブがありカウンセラーが学生と対面をして日本人の心を伝えていく、すばらしい奨学会だとおっしゃっていました。

東京クラブでスタートいたしました奨学会制度も最初からアジアを対象に行われてきました。現在もその傾向を引き継いでいます。

梅吉翁の遺徳を偲んで作られた奨学会は、昨年財團設立40周年を迎えました。朱山奨学会の状況につきましては、日本で民間の奨学会としては他の追随を許さないNo.1でございます。基本財産50億円、特別積立金が現在27億円、殆ど国債によって運用され、最も安全な形で奨学会の財産として残しております。その他毎年各地区各クラブから総計14億5000万円という多額の寄付を国庫で800人の学生に使い切る。という運営がされているわけです。他国でも、このような奨学会事業モデルを起こそうという考えをもっているところもあるようです。皆さんのご寄付によって、毎年1000人の奨学生を受入れてきましたが、ロータリアンの数が10万人を割り、特別積立金を取り崩していくのはどうかという意見もあり、現在800人になっています。奨学会に課せられた一つの目的は、奨学会の趣旨を皆さんにご理解いただいて、寄付が増していくことを考えなければならない、理事長としてその責任を強く感じているところであります。地方と都会の格差とか、大企業と中小企業の格差とか言われておりますが、全国34地区的普通寄付金は、優秀な地区とそうでない地区との間では、かなりの差がございます。これは、経済格差ではないと思います。むしろ朱山の奨学会のすばらしさを知らない、関心を示していない、「知識の格差」がこういう事を指しているのではないかと思うのです。

ですから私は理事長として各委員会にもお願いをして出来るだけ知識の格差がないように、皆さんが支える財團であるということにもっていくことを私の役割と考えています。

「人をつくり、世界に恩くす朱山」という言葉があります。これについては朱山学友の皆さんのが、いかにアジアで活躍をされているかをご紹介してみたいと思います。

昨年12月7~8日、台湾の朱山学友会総会に参加してまいりました。140~150人の学友の方々が台北に集まり、活気のある会でした。私が最も感動したのは、学友として台湾に帰ってそんなに時間の経っていない若い学友の方が、私と名刺交換するときに「私は何処のどこの大学で学び、どのクラブでお世話をになりました」と大学と世話クラブの名前を並行して説いていました。これこそ他の奨学会にはないものだと思

います。翌日、台湾の故宫博物院で朱山学友の林曼麗さんという前院長と波瀾な日本語で約1時間就談させていただきました。ちょうど1981~3年東京大学の大学院に朱山奨学生として学ばれ、1996年には東京藝術大学に学ばされました。世話クラブは東京保谷RCでした。そのとき林さんにいわれたのですが「日本人は胸ゆかしい。いいことをやってもやったやったというな、いいことは自然とわかるよ、という考え方をよく勉強してきましたが、時代も変わってきています。やった以上のことを示してはいけないけれども、いいことをしたらそれをPRして広めることも考えるべきではないか」と言われ、私ははっと思ったわけです。このような学友に各地を訪問していただけて、できるだけ機会をつくって情報の格差、感動の格差をなくしていくことに務めたいと思います。

最後まもなく日本の復興期において、アメリカのフルブライト資金で、日本の学生をアメリカで選んで勉強をさせた。その人は帰ってきてから経済界などで力を発揮された。朱山の奨学生が本当に日本人の気持ちを理解して、日本とそれぞれの国との平和を考えていぐに大きな力を貸していただけるのではなかろうかと思います。もう一つ『和解のために』という著書で大佛次郎論壇賞を受賞された韓国の学友がおられます。この受賞によせて次のように書いておられます。

「桜井善、慰安婦、靖國、竹島など経済文化交流が進んでもなお難い日韓関係を根本から見直し、これらの問題を巡る両国の認識のズレを改めようと試みた。日本に対する韓国の根強い不信は、戦後日本の変化が韓国にあまり知られていない故のことと私は考えた。このような確信は日本に留学していた大学時代からのものである。修士2年のとき朱山奨学生として浦和北RCで1年間お世話をいただきましたが、あのときのロータリアンの方々との出会いもこのような人材を育む基盤のひとつになったと思います。例会で皆様と語り機会を得て日本のある良質な部分を見る事ができたのは、今思えば貴重な機会でした。」また授賞式には当時のカウンセラーもご招待し、受賞スピーチで「私は日本を信頼していただきたいと申しましたが、このように言えるようにしてくださった皆様に感謝の言葉を直に聞いて頂きたかったからです」と述べています。私たちは世話クラブとして愛情をもって朱山奨学生に接している人は、間違いなく彼らの心の中に今読み上げたような印象を与えているということ。これを多くの人に知ってもらいたい。こうして感動の格差をなくしていくこと、それが私たちの役割ではないかと思います。

もう一つ、皆友が日本の恩を忘れずに恩返しをしよ

うと思っています。これは学友からの寄付金であります。東京都23区黄智輝さんという台湾の方からは、すでに120万円のご寄付をいただいている。それから横浜姉妹クラブのホストで韓国の田舎娘さんという方は、たばこを吸っておられたのですが、昔、寄付を集めるため「月にタバコ1箱を節約して」を合言葉にしていたという話を伝え聞いて、たばこを止めた金額毎月1万円をご寄付いただき現在31万円になっています。ベトナムから東京大森RCのホストで来た方からは100万円のご寄付をいただいている。世話クラブ東京臨海RCで、日本の大学院、その後米国で学び卒業の資格を取り北京で開催されている軍事さんは、日本になんとかが恩返しをしたいということです。毎年50万円ずつ今後ずっと寄付を続けていきます。というお話をいただいている。50万は追加できる日本へ送金できるマキシマムの金額です。このように我々がお世話をした大勢の方々が、心にとめていただいて、具体的にお礼をしたいと考えていらっしゃることは、なんとも我々にとってやりがいのある仕事ではなかろうかと思います。

最後に、私が日頃座右の銘にしております言葉を申し上げます。「夢をかたちに」という、富士通の山本卓真さんからいただいた言葉です。そのご本を20数年前に購入し、その後これを私の座右の銘にしておりましたところ、来年の韓国から出る李東成R I会長が「Make Dreams Real」この日本語訳が「夢をかたちに」です。李さんは2年間私と一緒に理事をやり、ゴルフをやったりと親しい相手です。夢をかたちにしていくのは簡単にできることではありません。思いますに、まず我々は良質の事をみなければなりません。物事の神髄をるために小説を読むこと、映画を見る事も大事です。自分の中にいい夢を持ってこれを実現するためには、不撓不屈の負けじ気がないとダメなんです。Give upしない、その目標をたぐり寄せるとまずは一生懸命やる。もう一つ大事なことは、物事を数値化してみることだと思います。財團法人ロータリー朱山記念奨学会理事長という私に分の過ぎた大きな重責も、一つひとつの夢をできるだけ数値化することによって叶えることができると思います。坂下事務局長以下、事務局と一緒にして色々な計画を立て、朱山を支えていただいている全国の地区の方々に伝えていきたいと思います。朱山梅古殿の心が、一人ひとりの学生に伝わるような、間違いのない奨学会事業を展開していくことが、日本のロータリーを世界に冠たるロータリーとする最も大事な道ではないかと思います。皆様方の心からのご支援、ご協力を申し上げ、私の話を終わらせていただきます。

台湾学友 16人が米山梅吉翁の墓参に来日

(財) ロータリー米山記念奨学会 事務局

台湾の米山学友会（正式名称：（社）中華民国扶輪米山会）が、6年ぶりに米山梅吉翁の墓参ツアーを企画。学友16人とその家族、合わせて22人が来日して、7月10日（木）、米山梅吉翁記念館を訪問しました。

今回の参加メンバーには、学友会の現理事長（第4代）の阮 允恭さん（1971-74年／神戸RC）、第2代理事長の許 邦福さん（1970-73年／京都東山RC）、第3代理事長の陳 思乾さん（1973-75年／大阪淀川RC）、台湾の米山学友で初めてガバナーとなった許 国文PDG（1975-77年／鹿島RC）、常務理事の林 錦宏さん（1987-88年／岡山南RC）、幹事長の王 壇棟さん（1987-89年／桐生南RC）など、台湾学友会の主要メンバーのほか、台湾の刑務所改革を成し遂げた呉 達璋（1986-87年／東京原宿RC）さん、村上春樹の翻訳家として著名な賴 明珠さん（1977-78年／松戸RC）、米山学友を中心に台中文心ロータリークラブを立ち上げ初代会長となった郭 鑑堂さん（1984-86年／相模原中RC）など、台湾の各界で活躍する学友が揃いました。【（ ）内は奨学年度と世話クラブ】

到着した一行を、(財)米山梅吉翁記念館の渡邊



総務理事長、井口賢明常務理事、木内昭夫事務局長、第2590地区（神奈川県）米山奨学会長の鈴木慶治さんらが温かく出迎えてくれました。一行が最初に向かったのは、今回の旅行の目的でもある米山梅吉翁の墓所でした。墓前に台湾から携えたたくさんのお土産を供えると、一同は声を合わせて「ありがとうございました」と何度もお礼を述べ、深々と合掌しました。中には涙ぐむ学友もいて、留学中の最も苦しい時間を支援してくれた米山記念奨学金と、この事業の精神的な源となった米山梅吉翁に対する深い感謝を今なお持ち続けていることが伝わってきました。そのような学友を代表して、前々理事長の許 邦福さんが「6年前にお参りしたときは雨が降っていて、米山先生がうれし涙を流しておられるのかと話していた。今日は曇り空だが、きっと私たちの訪問を喜んでくださっていると思います」と、墓前に思いを語りました。

その後は、記念館の展示室を見学。学芸員の市川さんのユーモアあふれる説明に、時折笑いも混じって、終始和やかに鑑賞して回りました。途中、市川さんの計らいで、学友たちが輪になり、手をつなぐ場面も。「あ

なたの右手をあげてみてください。手をつないでいると、自然と両方の手が上がるでしょう。自分の右手は誰かの左手とつながっている。いつもそのことを忘れないでください」との説明に、学友たちから感嘆の声が上がり、ひとときわ盛り上りました。

ホールでは、ロータリー米山記念奨学会の板橋敏雄理事長から歓迎のあいさつがあり、最近の米山記念奨学会のニュースが報告されました。また、学友会を代表して、阮理事長があいさつに立ち、「今日はとても暑い日でしたが、墓前でみんなが流していたのは汗だけではなかったと思います。私たちも今も感謝の気持ちでいっぱいです」と述べました。

その席上、岩手・宮城内陸地震へのお見舞いとして、台湾学友会からの義援金25万円が板橋敏雄理事長に託されました。また、記念館には、今回の温かなもてなしへの謝意を込めて、10万円が寄付されました。

「私は4回目の訪問ですが、何度来ても同じ



板橋理事長に義援金を託す台湾学友会理事長。気持ちで胸がいっぱいになります。ここに来るたび、米山記念奨学生となってから出会ったたくさんのロータリアンとの思い出が走馬灯のようによみがえります。ここは言わば、われわれ学友にとっての聖地。すべての米山学友に助けてもらいたい場所です。私たちも、また必ずここに来ます」と語った阮理事長。半日の訪問を終えて、笑顔で記念館を後にした一行は、中部地方を周遊して、13日の午後、無事に台湾に帰国しました。

台湾米山学友会を代表してご挨拶

中華民国扶輪米山会
理事長 阮 允恭



私たちは皆、米山記念奨学金のおかげで、留学生活をスムーズに送ることができ。本当に感謝しております。それだけでなく、日本全国のロータリアン、(財)ロータリー米山記念奨学会の皆さまのおかげで、われら米山OBが帰国後、米山の旗のもとに互いに知り合い、共に行動することができるようになりました。それが、今日の中華民国扶輪米山会の源となっています。

「飲水思源」(水を飲むときにその水源を想ふ—他人から受けた恩を忘れてはいけない、という意味の中国のことわざ)を合い言葉として、右

満に帰った後も感謝の気持ちを忘れず、米山精神を持って頑張っていこうと学友が集まっています。その感謝の気持ちは、泉のように心の中から尼きずに湧いてきて、今回もこのように大勢で米山梅吉翁のお墓参りをすることができました。私にとってはこれが4回目のお墓参りであり、6年ぶりとなります。前回こちらに参りましたのは2002年12月4日でした。米山OBなら誰もが来たかったと思いますが、いろいろな都合によって参加できない人もいました。元理事長の黄仁安氏も仕事のために参加できませんでしたし、徐重仁氏も、経営する台湾セブンイレブンの30周年記念式典のために来ることができませんでした。しかし、皆、米山梅吉翁への感謝の気持ちは同じだと思います。われわれは、彼らを含めて米山OBの代表として、今日のお参りに臨みました。

梅吉翁の墓前に立ち、お花とお線香をあげた後に、皆で大きな声で「ありがとうございました」とお礼を申し上げました。今日はとても暑



い日でしたが、墓曲で皆が流していたのは、汗だけではなかったと思います。年齢に関係なく、私と同様にOBたちが涙をぽろぽろと流している姿を見て、やはりみんな米山の子どもたちだと思いました。

こちらには何回来ても、興奮、感謝の気持ちで胸がいっぱいになります。何度も来ても新鮮な発見があります。記念館の展示室を見学し、貴重な資料や文献を拝見しました。米山梅吉翁の一生の偉大さとその心の広さを感じ入りました。また、それとともに、これまで記念館のために多くのロータリアンが長年にわたり尽力されたことを、身をもって感じました。頭が下がるのみです。なお、市川様の丁寧な説明は、本当に“錦心錦口”そのもので、感心しました。

将来、また機会があれば、このわれらの聖地に再び参りたいと思います。また、われわれのために、板橋理事長をはじめ、多くの皆さまがわざわざお越し頂き、大変感謝しております。今日はいろいろとお世話になりました。厚くお礼申し上げます。

梅吉翁の精神に感動

米山学友 奥憲璋



今回、記念館をはじめて訪問しました。一番心に残っているのは、やはり米山梅吉翁の精神です。墓前では、口では言ひ表せないほど、感謝の気持ちがあふれていて、胸いっぱいになりました。梅吉翁の奉仕の精神で、世界は一つになると深く感じました。翁の精神を受け継いだ者として、私は、現在の職務である受刑者の社会復帰のために、全身全意をかけて頑張りたいと思います。記念館の皆さまには、詳細な解説をいただくなど、大変お世話になりました。心から感謝申し上げます。

感謝と報恩の思いあらたに

米山学友 林 維 宏
(台北民生RC)



長年の願いが叶い、
今度はじめて記念館を
訪問することができて
感無量です。米山梅吉翁の墓前では、あらためて「感謝と報恩」の
気持ちがこみ上げてきました。今回の訪問で、

留学していた時にお世話をいたしたことへの恩返しをしたい、そして日台親善・交流の懸け橋になりたいとの思いが一層強くなりました。その一環として、私たちは現在、台湾に留学する日本人学生への奨学金支援の立ち上げに取り組んでおります。これを早期に実現することが私たちの目標です。

ロータリーファミリーを感じた記念館での思い出

米山学友 王 乘 棚



初めての記念館訪問で、最も心に残っているのは、2階を見学したときのことです。芸能人の市川さんから、みんなで輪になって手をつなぐように言われ、ロータリーソングを歌

いながら、言われるままに全員が右手を挙げました。結果、両手とも挙がりました。ロータリーの奉仕の精神で、全員の心をつなぐ、みんなロータリーファミリーの一員なのだと実感しました。

梅吉翁の墓前に誓ったように、いつも感謝の気持ちを持って、ロータリーの奉仕の精神を実行できるように頑張っていきたいと思います。そして、できれば、これからも3年くらいごとに記念館に墓参に行きたいと思います。

ポール・ハリスと月桂樹

足柄ロータリークラブ

昭和10(1935)年、ポール・ハリスが来日の記念に植樹した月桂樹は、帝国ホテル取り壇しのため、移植を余儀なくされた。すでに樹勢が衰えていたが、なんとか保存したい、と相談を受けたのが第一生命の矢野一郎だった。

矢野一郎は、第一生命保険相互会社を創立した矢野恒太郎の長男で、明治32年に生まれている。昭和22年から23年間にわたり同社の社長・会長を務め、この間生命保険協会会長を2期8年務めるなど、文字通り歴後における我が国の生命保険事業発展の基礎を築いた人である。

一郎は、ロータリークラブへの情熱も深く、今日、全国のロータリアンに愛唱されている「手に手つないで」を昭和27年7月に、「それでこそロータリー」を昭和37年1月に自ら作詞作曲

矢野一郎 氏(東京RC) 曲し、昭和35年7月1日には、東京ロータリークラブ第41代会長に就いた。

帝国ホテル旧館の解体が始まったのは昭和42年である。当時、一郎が帝国ホテルの社外重役も兼ねていたのと、昭和43年の竣工を目指していた大井町の第一生命本社ビル建設と時期が重なり、温暖肥沃な神奈川県大井町の台地に移植されることになった。

この樹の高さは2mくらい、直径は7~8mくらいであった。広大な敷地内に適地を選別し、富士見通りメガネ道上部付近に移植し、あらゆる手当を試みたが、この樹は結局芽吹しないまま枯死してしまった。移植の際には、万一に備えて大学や業者に依頼し、100本以上の鉢木も試みている。時期も苗も悪かったので殆どが枯れてしまったが、一郎は東京帝國大学の農学部を出ており、この辺の若木も持っていたので



第一生命本社に植えられた月桂樹

あろう。色々と関係者に指示し、遂に7本の植樹に成功した。植樹二世誕生までの経過について、一郎の次のようない記述がある。「昭和42年(帝国ホテル)本館取り壇しの際、中庭の木はすべて破壊されたが、この木だけは助けたいと第一生命本社に移植し、手を尽くして努力したが、すでに病害虫で餓死寸前のひどい状態であった。しかし、移植と同時に枝葉を切って鉢木した100本のうち8本(実際には7本)だけが活着した。これは第一生命の元社員で国際的に有名な野草研究家の中沢元之助君が、米国産の発根促進薬をいろいろな濃度にして苦心した結果奇跡的に根をつけたものである。」

鉢木の方は枯死したが、一郎はこれも無駄にしていない。その根の部分で点線用の植木を2本作り、1本は米国シカゴロータリークラブ本部に、あと1本は東京ロータリークラブに寄贈している。さらにその枯木から相当数のペーパーナイフを作らせ、ロータリークラブの会員など各方面に寄贈した。この時の舌代の文面に次のようなくだりがある。「さてその枯れた木ですが、これを使って何か記念になるものを作りたいと考え、家具屋に命じて削べさせたところ、満身虫の穴だらけで、到底隠すことはできなかつたことが判明しましたが、その根の部分で鉢を作つて、東京ロータリークラブに贈つて保存して貰うこととした。尚、その際その木からペーパーナイフを作らせたので、ハリスが植えた木の記念として1本贈呈します。一応亂暴な手作りに塗料を塗つただけのものですし、また虫の穴も沢山ありますが、却つて素朴で趣



木から作られたペーパーナイフ
があるかもしれません。更に丁寧に削り直して、
誰でもかければ丈夫なものになります。」

職員が、矢野一郎の指示にしたがって実際に二世を育成したのは、第一生命の子会社の第一生命総合サービス株式会社(旧第一生命相互生命保険株式会社で、大井本社本館ならびに台地18万坪の管理会社)である。ここで7本の活着に成功し、そのうち4本は要請によって各地のロータリアンゆかりの場所に移植されている。

平成11年1月現在、昭和42年に活着した二世の6本の所在は次のとおりで、それぞれ立派に成長している。

※ 第一生命大井本社台地上芝庭(神奈川県足柄上郡大井町)

※ 第一生命大井本社藤原の下(神奈川県足柄上郡大井町)

※ 帝国ホテル正面玄関左脇(東京都千代田区)

※ 北の丸公園(東京都千代田区)

※ 来山梅吉記念館(静岡県駿東郡長泉町)

※ 二宮尊徳記念館前庭(神奈川県小田原市)
第一生命総合サービス株式会社では、昭和50年以降その孫にあたる三世の挿し木を試み、育成中である。木の高さはそれぞれ1.5mくらいに成長している。これは、二世の育成を成功させた矢野一郎の意思に沿うものであろう。

『ロータリーの友』平成7年4月号、愛知県(第2760地区)の地区より、来山記念館の二世月桂樹から枝分けした三世月桂樹のことが記載されている。「一宮ロータリークラブ創立安野謙次初代会長が、これを枝分けして自宅の庭に丹精して植え、創立35周年を記念して、当クラブにご寄付いただいた。小さな瓶に入っていた小枝を社殿齊庭に定植。今日では3mあまりに成長し、この常緑樹は葉をいっぱい広げている。ポール・ハリスの遺徳を偲びつつ、ロータリーの理想と友愛が広がることを念願として一宮ロータリークラブの象徴となっている。」

主題の樹は、ロータリアンの間で、時として話題に上ることもあるし、また挿し木によつて増殖が可能であり、今後各地の記念樹から三世、四世と枝分けされて拡張されていくことであろう。その際この樹の由来が広く、かつ正しく伝承されることも、またロータリアンにとって意義深いことである。

この文章は足柄RC発行の「ポール・ハリスと月桂樹」からの抜粋です。

『ロータリーの創設者 ポール・ハリス』を再読して

篠島 清夫

(小田原RC)

米日双方のロータリーの創始者、ポール・ハリスと来山梅吉。あらためて来山梅吉の年譜を見ると、ポールと同じような生涯を過ごしたことわかる。

ポールは1868年4月19日生れ、来山は1868年2月4日生れ、共に78歳の生涯を終わっている。そして、二人とも苦学し乍ら他の国々を見て見聞

を広めている。来山は20歳から渡米して8年間の米国滞在での努力が実り、三井銀行に入社し、経済界の第一人者となった。ポールはヨーロッパ諸国を訪問して見聞と友情を広めた。

この二人の友情は一冊の本によって深くなり、1935年、ポールが来日し、両者が初めて会った時にはこの本で相互通じる信頼感と友情に喜び合うことができた。その本は『ロータリーの創設者ポール・ハリス』である。この原著がシカゴ

で出版され、世界40余国語のクラブ間に譲られ、来山個人にも贈与された。当時、日本は第70ディストリクト。日本にロータリークラブが出来て9年目であり、7つのクラブがあった。1929年10月には太平洋ロータリー大会が東京で開催され、北米、カナダ、ハワイ、オーストラリア、フィリピン、シナなどからロータリアンはもちろん、その家族まで500人以上が集まつた。そんな時期にこの本は出版された。

「此書の翻訳に就いて」と題した来山翁の文章がある。ここで、来山翁は書中最も感が深くする点を三つ挙げている。第一は、ポールの態度が如何にも誠実でロータリーのような大運動を起こした人の其れに似合わぬ程遠慮がちであること。第二に、彼は頗る文学的天分に富んでいることが記述の間に表れ、見事に全編の文を進めていること。第三に、彼は眞に実行実践の人で艱難辛苦をなめてきたその生涯から得た、單い人情味から一貫して交友の重きを知らしめた。ロータリーの精神がそこから出発して「己が他より施されんと希う如く他に施せ」という古き真理が新しき耳をもってこの人生を有意義のものとするに与つて力がある、という点である。この本を読んで、いかに来山翁がポールから学んだかがわかつてきたような感じがする。例えばこの文中に、ポールの行き先がどこであろうとも可能だったのは、彼が、常に服装を整えて身边に常に注意の行き届いた所を示していたからであった。来山翁も常に服装はきちんとしておられた。また、彼は仕事を選ぶのに階級に束縛されなかつた。そして、自分自身の内に備える最善のものを提供するということが彼の目標であったこととしている。

ポール自身が書いた物語は、ロータリーの生まれた歴史である。特にロータリーに於ける職業別の専門家なるものは、ポールがシカゴに於いて続いた生存の為の苦闘に対する反動であった。そしてその広い世界的な見解は、彼が多くの土地に足跡を印した5年間の放浪生活から生まれた自然的な成果である。



この本の中にすばらしい言葉を発見した。「人類の向上に役立たんとする運動の唯一の倫理的観念は、全部を包含し得る観念である。ロータリーは總ての人間の總ての生活に貢献する運動であること以外に、何物であることも満足してはならない。」東京ロータリー創立9年目の来山翁は、何かロータリーの神髄にふれたような思いで、凡て自分の力としたことであろう。ポールは信じていた。「自分の余生が永いにせよ短いにせよ、其は自分が飽くまで善用せねばならない一個の信託財産である。又信ずる自分の精神的富は肉体の健在に依附し、そしてこの両者は自分の堅固な基礎の上にある。」と。

ポールと来山から学んだ言葉を紹介したが、これは1960年以来私自身のロータリーの精神としている。ポールは次のように語っている。「この世界は常に変遷する。我々は変遷する世界と共に変遷する用意がなければならない。ロータリーの歴史は幾度も書き替えられねばならないでしょう」「社会生活に於ける人間の幸福は他人への思いやりと助け合いから生まれる」「我々は若い人達の中に将来に対する人類の唯一の希望を認めるものである」「仕事は大事だ。併し人生は仕事以上のものだとすれば、教養は技術以上のものである」「大事をなし遂げるには二つの要素が不可欠である。第一は先見の明。これなくしては有終の美はない」

一方、来山の言葉にも蘊蓄がある。「ロータリーは見えないところに仕事があり目立たないところに妙味がある」「ロータリーの病会は人生の道場である」「ロータリーは友達作り人作り。感動を分け合うところである」「ロータリーは決して画一のものとして統一せず、アジアの流儀を以て之を運営すべきである。」特に「アジアの流儀を以て~」の部分は、R.I.がアメリカに本部をおき活動していたことや、当時の世相などを考へると、勇気ある發言といえるだろう。

眞故如新、ポールと来山翁の言葉は、今も私たちの行き先を指し示しているような気がする。

記念誌編集

余話 (了)

「余話」を終わるにあたり

35周年記念誌編集委員長

井口 賢明

(沼津北RC)

米山梅吉記念館は、平成17年4月、35周年記念事業として、『越我の人 米山梅吉の遺音』を発刊した。このとき、4000部を印刷した。昨年12月、残部が數十部になり、いよいよ販売の準備に入った。本年3月末には、在庫が零となっていたところ、この4月に増刷が完了することとなった。

その印刷部数であるが、1500部とした。これまでの経過からすると、その在庫が全部販売できるまでに、相当年数がかかると思われる。しかし、増刷部数が少ないと単価が上がり、現在の領布価格である2,500円を上回ってしまうことになる。一方、1000部でも1500部でも全体の経費は、ほとんど変わらない。このため、1500部としたわけである。

増刷本は、事務局で相当な注意と時間をかけて、完全に誤植をなくした。そして、若干の補遺を付したものである。まだ購入をしていない方は、この際、購入をしていただきたいし、既にお持ちの方は、他の方に是非勧めいただきたい。

ところで、これまで7回にわたり、「福島余話」ということで、稿文を書いてきた。今回の増刷を期に、余話としての筆をおきたい。

これまで、書くべきかどうか迷っていたことがある。最終の稿としては、いさきかそぐわない内容であるが、思い切って記してみたい。それは、初期ロータリーのことについて記述が散見されることである。当初のころは、ひどく気になっていたが、だんだん気にならなくなってきた、最終回にいたったわけである。

そのもとは、米山梅吉が日本にロータリーを導入しようとした梗概についての『米山梅吉傳』の次の如き記載である。

「大正六年十月十五日、米山先生は日本政府の特派財政経済委員として渡米された。この年ロータリーの大会が米国でエジンバラで開かれた。それに参加する米国会員のために、大汽船が二艘連絡されたと聞いて、先生はロータリークラブに注目し、三井物産会社支店長福島喜三次氏に調査を依頼して帰朝された。」これは、二つの点で事実と相違している。

一つは、「この年(大正6年・西暦1917年)ロー

タリーの大会が英國エジンバラで開かれた」という点である。

もう一つは、「米山が二艘の船舶の話を聞いてロータリークラブに注目し、……福島喜三次氏に[ロータリーのこと]調査を依頼して帰朝された。」ということである。

①米山が1917(大正6)年10月、日本の特派財政経済委員として渡米したことはそのとおりである。しかし、この年、1917年に、ロータリーの大会が英國エジンバラで開かれたことはない。記録でも分かるように、スコットランドのエジンバラでロータリー世界大会が開かれたのは、世界大会としては、第12回目であり、1921年6月のことである。ちなみに、『ロータリー日本五十年史』によれば、この大会の参加者数は、2623人で、日本からの出席者はない。

一方、日本にロータリークラブ(東京RC)ができたのは、1920年10月で、加盟証があつたのは、1921年4月である。したがって、エジンバラの世界大会のときは、すでに日本にロータリークラブができていた。

それでは、エジンバラへの参加のためではなく、それより以前の大会のことではないかということも考えられる。しかし、それまでの国際大会は、全て米国内であつて、海外でのそれは、エジンバラが初めてである。したがって、その以前に二隻連絡ということはまずありえない。

なお、米山が1917年10月米国を行ったとき、3年半後の国際大会がエジンバラで開かれる決まっていて、既に船舶の準備が始まっていた。ということは考えなくてよいであろう。

ちなみに、米山は、エジンバラの国際大会に参加のため、二艘が連絡されたことを何かの折に聞いたのであろう。その話を漏らかにし、それが『傳』のような文章になったと考えられる。それでは、米山がその話を聞いたのは、どのような折であろうか。アメリカで聞いたのか、日本で聞いたのか、後者の可能性がないわけではないが、状況からすると、

米国で聞いたと考えられる。そうすると1921年6月以降のことになるわけだが、米山がアメリカに行ったのは、その以降では、1921年10月15日からの英米財團実業団のときである。このときは、11月10日から12月14日まで、断続的であるが、20日間ほどニューヨークに滞在した。この時の可能性が高いことになる。

②米山が二艘の船舶の話を聞いて、福島喜三次にロータリーのことの調査を依頼したというのは、①のことから自ずと事実と異なることになる。



それは別に、米山が1917(大正6)年10月、米国に行ったとき、福島にロータリーの調査を依頼したことがあるかどうかである。

米山は、1918(大正7)年1月1日、福島が駐在していたテキサス州ダラスの福島と会った。

大洋客船上にて 「ダラスの造船」(三井銀行常務取締役時代)とかいわれているところである。そのとき、米山と福島の間で、ロータリーの話を出たかどうかであるが、これを裏付ける確たるものがない。水を漉すよう申し訳ないが、多くの人が願望的なことから、ロータリーの話が出たといっているように思う。このことは、以前触れたことがあるので、ここでは繰り返さない。

なぜこのようなあら探しのようなことをするかである。「米山梅吉傳」は、米山のことについての定本的な役割を果たしている。したがって、米山のことを書こうとする人は、多くがこれを参考にする。このため、多方面にわたって、これが伝播することになる。その誤った内容が広まっていくのが怖いわけである。

内田稔『無我の人 米山梅吉』(昭60.8.1)、戸崎翠『社会貴族の先駆者 米山梅吉』(芙蓉書房出版 2000.3.15)は、『傳』の先の内容がほぼ同一で記述されている。

他にロータリー関係者の講演や文章でもこれを引用するものがいくつかあった。これについて、とくに戸崎の本について、記念館の前理事長坂

本壹美が苦言を呈した文章を書いたことがあった(ロータリーの友「米山梅吉翁の事績」平12.7)。

別に『傳』を非難するつもりはない。誰でも思いこみや思い違い、うっかり確認しないで書いてしまうこともある。とくに『傳』のこの部分の執筆者は、ロータリー関係者ではない。当時としては、確認に大変な作業があったことを考えれば、なおさらである。

ちなみに、極めて確かいことであるが、福島の地位である。いろいろある。①『傳』でいうように支店長というのがある。内田稔『無我の人 米山梅吉』は、支店長でもダラス支店長という。②ダラス出張所長というのもある。『福島喜三次伝』がそうである(ただし、所長格という)。この執筆者は、三井物産の支店長までつめた方である。上ほど確信があったのである。

ところが、『三井事業史』によると三井物産には、ダラスに支店も出張所もなかった。なにかの間違ではないかと、ずいぶん他の資料も当たった。やはり同じで、ダラスに支店も出張所があったということは確認できなかった。ただ、出張員という事務所のあった可能性はある。出張員といつても、一人だけの事務所というわけではない。出張員をキャップとして、その下に大勢のスタッフがいるわけである。出張所といつてもいいかもしれない。いずれにしても、具体的な立場まで確認できなかったので、記念誌では、急のため、ダラスでの最高責任者という表現とした。なお、ダラスには三井物産の子会社(南部物産)があったが、その社長ではあった。

『傳』の年表が他の本にも載せられている。記念館の『越我の人 米山梅吉の遺音』もこの年表をもとに作成した。その『傳』の年表に、明らかに間違がある。米山が「大正10年11月19日 フランクリン・ルーズベルト大統領と会見」とあることである。これについても、米山に関する文章で、フランクリン・ルーズベルト大統領と会見したというようなものを見かけることがある。1921年10月11日ころの米国大統領は、ハーヴィングである。フランクリン・ルーズベルトが大統領であったのは、1933年3月から1945年4月までである。このことは『傳』の本文222頁にも見える。なお、『傳』の年表に「大正11年1月 国際ロータリークラブを東京に創設」とあるが、これはよくわからない。

書物を出版することは、念をつかわなければならないことなどつくづく思う。できるだけ大勢の人に見てもらうことが必要だと感ずる。

米山家墓所の清掃奉仕

横浜鶴見北RC 雪吹周秀

横浜市鶴見区の曹洞宗大本山・總持寺に米山家のお墓があります。米山梅吉氏がご子息を亡くされた時にお建てになつたもの、と聞いています。執事佛像の石原裕次郎のお墓が奥の方にある。總持寺の何箇所かの墓地の中では一等地というべき一ト区画の入り口。木屋の直ぐ前に15坪以上はあらうという廣い敷地を御影石の1メートルほどの高さの石垣で囲い、その墓地の上に縦横80坪、高さ2メートルほどの大きな墓石が立っているのですから、良く目立ちます。併容と申すべきでしょう。

私共のクラブの例会場はここから直線距離にして200メートルほどの近くですから、日本のロータリーの祖とも仰ぎ、敬愛する米山翁ゆかりのものと認識して、かねてから心ある者が折り々々にお参りをしております。ただ、米山翁の遺骨は此處には無く、詳しい事情は良くわかりませんが、管理が行き届いているとは言えない状況で、植木の枝は伸び、敷地は草荒れという有様は、裕次郎の墓に隣で居る人など多勢の人の目に見苦しく映るのではと心を痛めておりました。

私共、横浜鶴見北RCはこの4月6日に創立35周年を迎えます。そこで、その記念行事の一環としてこの墓地の清掃奉仕をやろうというこ



となり、3月23日(日)に実施しました。16名の会員のほか、会員夫人も加わり、上天気の青空の下、1時間ちょっとの労働に勤しみました。当日は朝々、横浜RACの方達も同様の計画を立てていたのでご一緒に。当地区的の亀ヶ谷邦博がバナーもご夫婦でお見えになって参加して下さいました。春分の日が雨だった為か、この日はお墓参りの人々が多く、大集団で清掃をやっている我々をちょっと驚いた目で見て通っていくので、お掃除の様のジャンパーの背中に書いてあるクラブ名が見える様にわざと背を向けて、さも仕事をしている様な振りをしたのは私だけでしょうが、些かやり過ぎだったかと反省しています。

墓地の上に全員が乗り切れないほどの人数でしたから、交代で、いわば遊びながらやった様なものでしたが、多勢の力は凄いものですね。地面は雑草のかけらも無く掃き晴められ、墓石はピカピカという仕上がりでした。

終わって丁度お昼、10分ほど歩いて鶴見駅前の方へ、当クラブ会員経営の中華料理店「翠華樓」にRACの方達を招待し、更なる交流を深めました。

とても溝々しく、充実した一日でした。



「Keep Your Name Clean」(汝の名を汚すなれ)

山田養蜂場の社員は「Keep Your Name Clean」という言葉が刻まれた名刺入れを持っており

ます。これは、ロータリアンである弊社代表の山田英生が自身の尊敬する、わが国ロータリーライフの創立者であり、かつ、わが国の銀行の生みの親といわれる、三井信託銀行創立者の米山梅吉氏の心に習って作成したものです。山田代表は、「すべての事業は世のため人のためになされるべきである」との、米山氏の考え方方に非常に感銘を受け、氏が三井信託銀行の行員に対して作り配ったとされる、この「Keep Your Name Clean」の言葉の入った名刺入れを複数枚。2006年度より全社員に対し、入社時に手渡しをしています。

山田は、全社員を前に、この特別な想いの込められた名刺入れについて、次のように語りました。「この真の名譽に生きる生き方というものは、わが国古来より日本人の心として世

株式会社 山田養蜂場

健康食品事業部 上原俊男

界中から尊敬されていました。武士道の精神に通ずるものでした。世間は今、利益至上主義、経済一辺倒の風潮がありますが、個人も企業も

そのような考えでは絶対に長く続くはずがない。どうか我が社の社員は我が社の企業理念を肝に銘じ、この名刺入れの言葉に恥じない真に心ある仕事をしてもらいたい」

「Keep Your Name Clean」という言葉は、我々が企業人としての誇り、また人間としての誇りを、常に忘れてはいけないことを教えてくれます。名刺入れを開く度に、自分の名刺と「Keep Your Name Clean」の言葉を目にしても、襟を正す思いで、誠実な仕事をしていこうと決意しております。

—100円の綿糸が館と全国を結ぶ—

全国1人年間100円募金運動

全国で展開中の運動です。事業費の不足をおぎなうために毎年度継続して行っております。何卒よろしくお願いいたします。クラブ単位、地区単位でご送金いただく方が便利ですが、勿論個人でも結構です。この運動は任意のご意志によってお願いしております。

賛助会費ご協力のお願い

記念館運営及び事業費の一層にあてるため、引き続き賛助会員による賛助会費の運動を続けております。会費は、お一人年3,000円(1口)です。賛助会員には記念館報を直接お届けしております。個人でもクラブ単位でも結構です。ご入会の程お願い申し上げます。

- 100円募金のお申し込み、振込先
- 賛助会費

郵便振替口座 番号 00820-4-57730
財団法人 米山梅吉記念館

ガーデンのある美術館リゾートへようこそ。

豊かな自然に囲まれたクレマチスの丘は、まるでそこだけ時間の流れが定まってしまったかのような癒しのエリア。クレマチスの花を中心とした四季物語に感動される庭園としてのガーデンをはじめ、ショリヤー・ヴァン・ベルナル・ビューム等の巨匠の作品を心ゆくまで鑑賞できる美術館、新鮮な地野菜を中心とした料理が料理教室として楽しめるアトリエなどがあります。



米山梅吉記念館へお車で 15 分



花・美術館・食
クレマチスの丘

〒411-0931 静岡県長泉町クレマチスの丘(スルガ平)347-1
TEL(055)989-8787 ホームページ <http://www.clematis-no-oka.co.jp>
JR三島駅より無料シャトルバス運行 水曜定休

米山梅吉記念館のご案内

開館時間

午前10時～午後5時 (但し11月～3月は午後4時まで)

休館日

- 月曜日
- 12月28日～1月4日
- 整理のための休館日
(5月・8月の特定日)



米山梅吉記念館 館報

Vol. 12

発行日 平成20年8月15日
発行者 審議法人 米山梅吉記念館 理事長 渡邊脩助
〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1
TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101
URL: <http://yoneyama-umekichi.jp/>
e-mail: yumh@ai.tnc.ne.jp

印 刷 フタバ印刷株式会社